

蒼のサリア 魔法使い

大杉和馬
表紙イラストミルクセーキ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『蒼の魔法使い サリア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



蒼の
魔法使い
サリア

大杉和馬

表紙／ミルクセーキ

登場人物紹介

Characters

サリア

王立魔法学園に通う生真面目で努力家な天才魔法使い。蒼い髪と紺碧の瞳、発展途上のスレンダーな肢体の美少女。

サアアア……ッ。

緑深い草原の上を涼やかな風が吹き抜けていく。緩やかに頬を撫でる優しい風に吹かれ、その場に静かに立つ少女の肩口で透き通るような空色の髪が揺れていた。

迷うことなく真つ直ぐに前を見据える瞳は、奥深い森の湖を思わせる澄んだ紺碧。芸術品のように彫りの深い顔立ちは気品に溢れ、卵型を描く頬のラインは陶磁のように滑らかだ。雪のような純白の肌は、しかし不健康とは縁遠く、輝かんばかりの生気をその身の内から放っている。

そこに居たのは一人の美しい少女だった。まだ歳は幼いとさえ感じる。年齢にして十代の後半に届いているかどうかというところだろう。

皺一つない清潔なブラウスを纏まとい、その白い布地にやや慎ましやかだが形良い胸の膨らみが映える。折れそうなほど細い腰から続く瑞々しい美尻のライン、細かいプリーツの入った紺色のフレアスカートは輝くような太股の半ばまでしか隠しておらず、眩しいほどに健康的な脚線を包むニーソックスの際どいラインの上で、風をはらんで小さく揺れていた。

「……」

だが、ただの美しい少女などではありえない。そのすらりと伸びた両脚は地についてなごいかなかった。そう、いかなる力が働いているのか、彼女の小柄な身体は地上10mほどの高さでピタリと停止している。艶やかな桜色の唇から紡がれる不思議な言葉。しなやかな

指は不似合いなほど無骨な櫛の杖を握り、飾り気など欠片もない漆黒のマントをなびかせながら立つ姿には威厳さえ感じる。

丈長な黒マント、杖、そして謎の呪文で異能の力を操る。魔術師……。誰もがその単語を頭に思い浮かべるだろう。そう、力ある呪文を紡ぎこの世の不思議の理を操る異能の使い手、それこそがこの少女の正体だった。

そんな少女を四人の男たちが見上げ、彼女を囲むように立っていた。四人とも歳は少女よりやや上くらいだろう。彼女と同じように黒いマントで身を包み、手には杖を握っていることから、彼らも魔術師だということが窺い知れる。

その場を支配する異様な緊張感、それは紛れもなく戦いのソレだ。息苦しいほどの緊張感の中、男たちと少女が紡ぐ呪文の不思議な韻だけが朗々と響き渡った。

ゴオオオオオッ!!

一人の男が気合いととも杖を振ると宙に制止する少女を突如として紅蓮の炎が襲う。何の予兆も、気配さえなく生み出された業火は一瞬で巨大な竜の姿を形作り、誰も声を上げる間さえなく少女をその顎の内に呑み込んだ。

魔術で生み出された炎の竜、幻などではない。チリチリと空気を焼く膨大な熱と目を焼くほどに目映ゆい輝き、数千度にも達すると思われる炎の中に取り込まれた少女は悲鳴さえ上げる間もなく灰と化したのだろうか？

否、可憐な少女を呑み込んだ紅蓮の魔竜の腹は次の瞬間倍も膨れ上がり、内側から爆ぜるように消し飛んでいた。その中から現れたのは全く変わることはない少女の姿、火傷やけど一つなく、衣服には焦げ目さえついていない。

「魔力の集束が遅いです。火竜を構成する術式も稚拙すぎます」

鈴を転がすような可憐な声が辛辣な評価を下す。罵倒しているのでも、侮辱しているのでもない。ただ厳然たる事実を評価している静かな声音に、術者である青年の顔が恥辱と悔しさに歪む。

だがさらに問題点を指摘しようと言葉を紡ぐ少女を襲ったのは金色に輝く雷だった。天より降り注ぐ無数の稲妻が、少女の周囲に等間隔に突き立ち、まるで檻のように彼女を閉じ込める。

「はっ!! 油断したな。呑気に講釈なんて垂れてる場合かよ!!」

雷の檻が徐々にその輪を締め、中に捕らわれた少女をその空間ごと押し潰さんと迫り、さらには無数の岩塊と氷の槍が浮かび上がり、その周囲を取り巻いた。

「なるほど、雷による捕縛結界に、氷と地の攻撃術による連携……狙いは決して悪くはありません」

そんな状況においても少女は微塵みじんも焦ることない。何事か小さく呟き、その手にした杖を静かに水平に払った。ただ、それだけで彼女を閉じ込め、内側へと圧縮、押し潰そうと

していた稲妻の檻がピタリと停止する。

「な……っ!？」

それどころか雷の輪は外へ向かってゆつくりと広がっていく。雷を制御していた男が必死になって杖を構え、呪文を唱えようともその速度を遅くすることさえできない。

「そ、そんな……僕の雷鎖結界の制御が奪い取られただって？」

四人のうちの一人が驚愕と動揺の叫びを上げる。もはや彼が少女の動きを封じるために操っていた雷の檻が、ガラスの割れるような澄んだ音とともに三つの術は碎け散る。の槍へと激突し、ガラスの割れるような澄んだ音とともに三つの術は碎け散る。

自分たちの術をあつさりとは破られ、呆然とする四人の男たちの頭上から見えない風の塊が撃ち下ろされる。魔術を放った直後の隙だらけの彼らは逃げることも、防ぐこともできず、為す術なく地面へと打ち倒されていた。

「連携に隙が多く、組み合わせる術の相性もよくないです。何より術の制御が甘いです」
ふわりと、軽やかに地に降り立つ少女はさらに男たちの欠点やとった戦術の難点を細かく指摘していく。その姿と言葉に自分より年上の男たち四人を同時に相手にしたという気負いも、疲労も感じさせない。

ブルーサファイアの瞳が呆然と自分を見上げる四人の術者を静かに睥睨し、凜と響く涼やかな声が男たちの尊厳を打ちのめす。少女自身、男たちを侮辱する意図は全くない。む

しろ、彼らの欠点を指摘することで、もっと切磋琢磨して欲しいという思いやりさえその声には感じられる。

「く……っ」

だが自分よりも遥かに年下の少女に、四人がかりで為す術なく打ちのめされた男たちにその思いやりはむしろ屈辱だっただろう。だが相手に怪我を負わせないように、それでいて逃げられないように、絶妙の力で自分たちを地面へと這はいつくばらせる少女の魔術はあまりにも圧倒的で、解呪も抵抗も全くできなかった。もはやこの少女と男たちの勝敗は誰の目にも明らかである。

「よろしい、そこまでだ」

それを見計らっていたかのように少女たちよりもずっと年配の男が声を上げた。少女と風の呪縛から解き放たれた少年たちは慌てたように姿勢を正し、男の次の言葉を待つ。

「相変わらず見事だったぞ、サリア。四人も己の克服すべき欠点がよく分かったであろう」
年配の男の称賛の言葉に、サリアと呼ばれた少女は取り立てて喜ぶことも誇ることもなく、ただ小さく頭を下げ、男たちも恥辱に顔を歪めながらも礼を取った。四人の男たちとサリア一人とのそれは模擬戦闘だった。年配の男の後ろには十人以上の同じような服装に統一された男女が整列している。

そこはセティニティ王立魔法学園。将来の優秀な魔術師を育て、軍隊に王宮、また様々

な研究機関に送り出すための教育機関。それがサリアや男たちの所属する組織の名だった。

「おいおい、マジかよ。あの四人だって、戦闘魔法ならうちの学園で上位の連中なんだぜ？」

「それを四人同時に全く寄せつけないなんて……」

「知ってるか？ あいつ今度、飛び級で高等魔法院に進むらしいぜ」

「なんだよ。それ、やっぱ才能の違いってやつなのかよ……」

ザワザワザワ……。

周囲で先ほどの戦いを見ていた何人もの生徒たちからはどよめきと畏怖の籠った囁き声ささやが聞こえる。教師である男はサリアの技量を見せることで、他の学生たちの模範となるようにこの模擬戦を見せたのだろう。

だがあまりに次元の違ったサリアの魔術の技量に生徒が抱いたのは、半ば諦めにも近い憧憬、つまらない嫉妬心、中には恐怖すら抱いている者もいた。聡明な蒼髪の少女はそれを敏感に感じ取り、小さく溜め息をつく。

「では……、私はこれで失礼します」

教師に礼を取って頭を下げると踵かかとを返した。今回のように指導をすること自体は決して嫌いではない。むしろ、それで皆の技量や向上心が上がる、いうなれば喜ばしいことだった。

だが自身の才あぐらに胡坐をかき、満足に努力もしないで悦よろこに浸っている者が多すぎる。それどころか魔術という限られた人間にしか扱えない異能の力を与えられたことで、それだけ

で自分は特別なのだと勘違いしている者さえいた。

(なんて馬鹿なことを……)

幼少時より敬愛する兄に絶えず諭されてきた。魔術とは所詮しよせんは知識であり、技術にすぎない。多少の才能があったところで磨かない玉はただの路傍の石と同じだ。と、この自分の力としてその言葉を信じ、幼いころより積み重ねてきた努力の結果にすぎない。

(そうだよね？ 兄さん……)

だが実際、学園に入学しても魔術の腕をほとんど成長もさせずに卒業していく生徒がここ最近非常に多いという話である。自分のようにさらなる魔術の高みを目指し、上位の魔法研究院に上がろうとする者さえ稀なのだ。学園で自分に割り当てられた個室に向かいながらもう一度深く溜め息をついた。

先ほど四人の男たちを必要以上に圧倒し、打ちのめしたのも自分に対する敵愾心が向上心へと繋がってくればと思っただけだった。

だが、そんな少女の考え方は極めて少数派で、教育者である教師にさえ受け入れられることは少ない。その優れた魔術の腕と美貌で尊敬と憧れを集める一方、少女はこの学園内では孤立しがちだった。

ナァ~~~~~♪

そんな物思いに耽ふけっていたサリアを現実へと呼びもどしたのは小さな鳴き声だった。ガ

サガサと茂みが揺れるとそこから一匹の黒猫が飛び出してくる。

まだ子猫と言っているだろうか。まるで親猫にじゃれるように少女の足元に背中を擦りつけ、その蒼い瞳を見上げながら甘えたように鳴き声を上げた。

「フフフ……どうしたの？　こんなところまで来て……お腹がすいたの？」

それまでの憂鬱そうな表情が嘘のように晴れ、両手で宝物でも抱えるようにそつと子猫を抱きあげる。先ほどの厳しくも凜とした魔術師の顔でもなく。将来を憂う優等生の顔でもない。ただ歳相応の無邪気な笑みが少女の幼い美貌いっぱいに広がった。

子猫がゴロゴロと喉を鳴らしながらサリアに頬を擦りつけると、擦ったそうに、しかし嬉しくて仕方がないと言うように少女も笑い声を上げる。心を開いた相手にしか見せない輝くような笑みと屈託のない声音は、心癒やされるほどに微笑ましい。

「あゝあ、本当にここで君を飼えたらいいのにな……」

幸せいっぱいという顔で猫の瞳を間近で見つめながら、残念そうに呟く。元来、動物好きである少女だが学び舎であるこの学園でペットを飼うことはできない。

一ヶ月ほど前に自分の部屋の近くに迷い込んだこの子猫。学則に違反する行為だと分かっているながら時折この子猫に餌を与え、雨の日など部屋へと連れ込んだりしていた。孤独になりがちな天才少女の心を慰めてくれる大切な友達だった。

「待ってて、何か食べられる物を持ってきてあげるからね。……静かにしているのよ？」

ソツと子猫を茂みに下ろすと、シートと悪戯っぽく人差し指を唇にあてる。誰にも見られていないかキョロキョロと周りを見回すと、自分の部屋に向かつて小走りに駆けだした。まるで悪戯を見つけられないように警戒する悪童のような姿は普段の優等生姿からは想像もできない。

ナア〜ソツ!!

そんな少女の後ろ姿を見送るように一声小さく鳴き声を上げた黒の子猫。だが、先ほどの愛らしい姿と一転して、その瞳が禍々しい真紅に輝いたことを知る者はいなかった。

「……で、あるからして地と火の魔術の合成は1…2の比率で織り交ぜることが望ましく……」

野外の模擬訓練の授業から数日がたった。サリアたち学院の生徒は、広い講堂内で魔術論の講義を受けていた。だが多くの生徒たちは退屈な理論などほとんど興味はないといった風体で、真面目に聞いているのはサリアを含めた数人のみである。隣の生徒と無駄話に花を咲かせる者、コクリコクリと船を漕ぐ者までいた。

(……授業中だというのに……)

形良い眉を不快そうに歪め、あまりに不真面目な他の生徒たちの授業態度に、そしてそれを注意しようとする教員に生真面目な少女は怒りを覚える。

「うむ、ではサリア。君にこの証明と実演をお願いしようかな？」

そんな緊迫感のない教室内の空気を何とかしようと思ったのか？ 初老の教師が教室の最前列で授業を受けていたサリアを指名する。

「はいっ!!」

躊躇なく、打てば響くような快活な返事とともに、真っ直ぐに背を伸ばした少女が教壇に向かつて歩み寄る。中央の教壇に向かつて低くなっている教室の作りに、自然と生徒たちの視線がサリアに集中するが物怖じした様子もない。

「それでは説明に入らせていただきます」と思います」

自信に満ちた佇まいたたず、大声を出しているわけでもないのに教室全体に凜と響く心地よい声。何より心の底から皆に理解してもらおうと懸命になつて説明する少女の姿に、授業に興味さえ抱かなかつた生徒たちや教師の注目さえ自然と引き寄せた。

迷いなく真っ直ぐ生徒たちを見据える紺碧の瞳。その姿に教えてあげる、などといった偉ぶつた態度など欠片もない。自身が持っている知識を、技術を皆にも広く知って欲しい。そんな真摯な少女の心の内が周囲にゆっくりと伝播し、どよめいていた教室の喧噪が徐々に収まっていく。

「このように、大地から引き出した魔力を……」

ドクン……。

水を打ったような静けさの中、熱意を込めて説明を行っていたサリアの身体の内、不意に大きく鼓動が脈打った。

(え…………?)

ドクン…………と、さらにもう一度。気のせいかと思おうとした矢先に、またも大きく身体が震える。何の予兆もなかった突然の身体の変調に少女は、戸惑いながらも説明を続けた。
(何…………?)

最初は湖に投げ込まれた小石が起こした波紋のような違和感だった。さざ波一つたたなかつた無垢な湖畔を掻き乱す波のように徐々に鼓動の荒れは大きくなる。

換気のされていない真夏の密室に閉じ込められたような熱気に、汗がジワリと滑らかな肌の上に浮かび上がる。魔法で均一に管理されたこの教室ではありえない現象だった。奇妙な息苦しささえ感じ、盛んに空気を求めて喉が上下し、唇を湿らそうと微かに口が開閉する。

「はあ…………そしてこの理論はかつてこの魔法学院を創設した偉大なるカーレイスが発見したもので…………」

鼓動を速める心臓に、全身を駆け廻る血流は当然のように速さを増し、色白なサリアの肌をうつすらと色っぽい桜色へと染め上げていく。僅わずかずつ荒くなつていく呼気に、詰まることなく滑らかに進んでいた説明が途切れ、小さな乱れが生じ始めた。

『うんうん、甘いなあ。……さすがはサリアちゃんの蜜だね。僕の呪でこんなに気持ちよくなってくれてるなんて嬉しいよ』

「な、馬鹿なことしないで……そ、そんな気持ちよくなんて……うつ……あ、あるわけ……はあうっ!!」

さらに煽るように舌打つ音を大きくしながら、卑猥な言葉を紡ぐ猫に恥辱の思いが炎となつて燃え上がる。こんな感覚が気持ちいいわけがない。しかし、性的快楽と言うものを知らない少女は自分の身の内を蝕むおぞましいうねりが徐々に甘く蕩けるようなさざ波に変じ始めていることに気付かなかつた。

『君の考えている通り、たとえここで君を犯して、処女を奪つても君の心は奪えないだらうね。でも……それならさらなる呪いの楔を打ち込むだけさ』

引き攀つたような笑い声を響かせながら姿を見せない術師が不吉な宣言をする。その言葉を含図に、ふわりと何かが宙に浮き上がった。

「な、なんですか……？ それ……？」

奇妙に歪な形をした棒状の木型。魔法一筋に邁進してきたサリアの知識にはない。だが、穢れを知らない少女の防衛本能とも言うべき部分が盛んに警鐘を鳴らしている。

明らかに男性器を模したものだ。違いと言えば男根と言うにはそれは細く小振りなことだろうか？ だが何より、竿の部分から亀頭の部分に至るまでびっしりと得体の知れ

ない呪紋が刻まれており、禍々しいほどの呪力がそこから立ち上っている

『これはね。僕のオチンチンを正確にトレースしたものなんだ。もっとも君を壊さないためにちよつと小型サイズにしてるんだけどね♪』

「……っ!!　そ、そんな……!!」

穢される恐怖に腰が震えた。どれほど気丈な少女でも犯されることに恐怖を覚えないわけがない。何よりサリアは未だキスさえ知らない処女なのだ。この期に及んで姿も見せない卑怯者に、しかもこんなおぞましい呪物などで純潔を奪われるかもしれない。

必死に逃げようと狭いベッドの上を後ずさるサリアの足首を不可視の腕が掴んだ。そのままぐいっと乱暴に脚を引かれ、バランスを崩した少女はベッドの上に突っ伏すように倒れ込んだ。

『安心してね。純潔は僕が直接頂くから……そうだねええ。今日のところは……』
自分に背中を向け、うつ伏せに倒れたサリアにちょうどいいとばかりに、禍々しい呪物がフワフワと近づいていく。

「ひっ、やっ、来ないで……来ないでください!!」

その狙いを悟り、肩越しに振りかえったサリアは恐怖の眼差しで彼女らしからぬか弱い悲鳴を上げる。その呪物の向かう先は、少し乱れ捲れているとは言え丈の短いスカートに包まれた少女のお尻。先ほど濡れた下着を脱いだばかりのそこはスカート一枚だけで下は

剥き出しの状態だった。

「い、いやっ!! こんな……こんなの嫌です!!」

たとえ身体を汚されようと心は渡さない。そう覚悟を決めたところでこんな得体の知れないものに純潔を奪われるなど、潔癖な少女にとつて耐えられるものではない。固定され動かない両脚に力を込め、腰だけを左右に振って疑似男根の狙いから自分の大事な場所を逃がそうと暴れた。

『無駄無駄……それに言つたらう? 今日の僕の狙いは……コ・コ♪』

「あ……っ!!」

思わず洩れた小さな悲鳴とともに全身が震える。無機物のはずなのに奇妙に熱く、不思議な弾力さえ感じる矢尻。そこが触れたのは穢れを知らない少女の不可侵の花園などではなかった。

スカートを捲りあげられ剥き出しにされた白桃の尻たぶの狭間、そこでひっそりと息づくセピア色の窄まりに熱く、硬いものが当たっている。

「ち、違つ、そこは違います!!」

火を噴きそうなほど真つ赤になった頬で、思わず目をギュッと閉じて絶叫する。そこは自分が普段排泄に用い、他者の手はおろか、目に触れることも想像したこともない不浄にして禁断の場所だ。

ビクツと、触れられた窄まりが震え、可憐な菊孔は怯えるように縮こまる。尻肉は緊張と恐怖に硬直し、赤子が嫌々をするように左右に揺れた。

『違わない……ここでもいいんだよ。……ここだね』

怯え、嫌悪と背徳感に震える少女に対し、サディスティックな悦びに震える声は容赦など微塵もする気はないようだ。

そのままグリグリと回転運動さえ加え、菊花のような小さな窄まりの中心へと矢尻のような先端を突き立ててくる。硬く閉じられた禁断の門を無理矢理抉じ開けようとする痛み、サリアは堪らずその白い喉を反らし、両手でシーツを握りしめた。

「くっ……あああ……そんな……そんなの無理です……いや、裂けてしまおう……」

濡れてもおらず、解されてさえいない場所への強引な侵入に少女は苦痛しか感じることができない。しかも、自分が排泄するために使うような汚らしい箇所を他者に触られる羞恥と屈辱、禁忌の場所を呪具などで責められる背徳感と罪悪感が潔癖な少女の心を締めつける。

強引な挿肛に肺から息が押し出され、可憐な窄まりが醜い男根に無理矢理拡張されていく。内側から割れ裂かれるような痛み、ゴツゴツした竿部分が直腸を削りながら扶えぐり進んできた。皺一つなく広がりきったサリアの肛門は、ズリズリとめり込んでくる異物による圧迫痛にビクビクと痙攣を繰り返す。

「んぐうあ……い、痛い……苦しいん……です。はあ……痛っ」

サリアは内なる拡張感と圧迫感に苛まれ、苦しげな息の下、苦痛に大きく喘いだ。直腸を一分の隙もなく埋めながら進んでくる剛直に、満足に息も継げない。擦れきった声が恐怖と、息苦しさに悲鳴を上げた。

「あつ、やつ。もういや……やあつ、ああああああ……つッ!!!」

悲痛な少女の叫びが室内に木霊する。ついに根元まで埋め込まれた衝撃が腰骨を揺さぶり、脊椎を伝ってその形良い鼻先までズンと突き抜けた。

尻を内側から引き裂かれ、臀部^{でんぶ}を差し出すような屈辱の恰好での陵辱肛交に、少女の潔癖な誇りは千々に引き裂かれ、絶望へと追い詰められる。触れられるどころか、見られることさえ辛い不浄の場所をついに犯されてしまった屈辱に、赤みを帯びた頬をいくつもの大粒の涙が零れ落ちた。

『ひひひ、お尻のヴァージン御馳走様。サリアちゃんのお尻の中はきつくて暖かくて凄くいいなあ』

下卑た笑いを上げ、美しい少女の尻を初めて犯した悦びに、男の疑似男根はまるで生物のように直腸内部で脈動する。感覚が男と繋がっているのだろう。男はさも心地よさそうに声を上擦らせ、卑猥な言葉で少女の恥辱を煽った。

ジンジンと盛んに異物が発する痛みと息さえできない苦しみに、懸命に身を振りながら

も耐えようと足掻く。濡れてもいない未通の女体に無理矢理侵入したモノが、盛んに訴えてくる存在感に、より強く敗北感と屈辱を刺激された。

(こんな……こんな……お尻でなんて……私、お尻でなんて……っ)

それ以上は思考に浮かべることさえ忌避してしまふ。うつ伏せになったベッドの上で悔しさにシーツを握りしめ、洩れそうになる嗚咽を必死に飲み込んだ。初めての異物の侵入、それもお尻などに作り物とは言え男根の挿入を強制されたサリアのショックと恥辱は計り知れなかった。汚されてしまった。ともすれば純潔を奪われるよりもその喪失感と汚辱感
は強かったかもしれない。

「あぐっ!! がっ、やつ、あざいいいい!!」

だがそんな悲しみと屈辱に震える少女を、こうかつ狡猾な肛虐者は放つて置いてなどくれない。突如としてグネグネと蛇のように直腸内で暴れ回る呪根、姦通に痛めつけられたばかりの粘膜を乱暴に掻き回され、閉じた脛の裏を無数の火花が飛び散った。

ベッドの上で弾けるように腰が躍り、力任せに握ったシーツを引き千切らなければに掻き寄せ、ニーソックスに包まれた爪先が真っ白な布地を懸命に限界まで引き伸ばす。尾骨の後ろをハンマーで殴打されるような衝撃が脳髓を頭蓋の裏側へと叩きつける。

『痛いのは、苦しいのは最初だけ、さ。はっ、そのうちココでするのが……病みつきに……はっ……なる』

「つうううっ!!　ぐっ、だめ……死んじゃう……はぐっ……こ、んなの壊れちゃうううう!!」

8の字を描くように少女の直腸粘膜を擦り上げ、皺の伸びきった括約筋をその幹で抉り抜いた。焼けるような痛みで絶叫し、内部を杭打たれるような衝撃に幾度も息が詰まる。排泄物以外のモノが初めてねじ込まれた穴、そこを熱棒に普段と真逆のベクトルで掻き回された。

蒼い髪が乱暴な動きに汗を弾きながら乱れ舞い、汗を吸った白のブラウスがその下の赤い蕾を半ば透け見せながら風をはらんではためく。ベッドのスプリングが激しく軋みを上げ、煽られた風が少女が発した淫卑な香りを運んで室内に充滿させた。

（苦しい……熱い……私……私……このまま死んで……しま……）

魂を削り取るような乱暴な挿入と排出の連続に幾度も脳内で火花が飛び散り、意識が光と闇の世界を無限にも行き来を繰り返す。傷つけられた粘膜を竿と亀頭でさらに深く抉られると、背骨が折れるほどに反らし、喉から金切るような悲鳴を絞り取られた。

『大丈夫だって……そろそろ効いてくるころだか……』

「がはっ……ぎっ……あぐああ……な、なに……え？」

男の不吉な言葉に、ズキズキと焼けるような痛みを発していた粘膜から、痛みが薄らいでいることに気付く。しかしお腹の中から炙られているような熱は一向に引かず、全身か

ら噴き出す艶汗は匂いたつほどに濃密な色気を醸し出す。

体内で呪力がグネリと鎌首をもたげるのを感じた。炎症を起こしたようにヒリヒリと痛みを発していた粘膜から浸透した呪毒が、しきりに熱さを訴え、体内で膨れ上がる異様な焦熱感に苦しい息をしきりに吐き出した。

（熱い……お腹が燃える。な、なんなの？　で、でもこんな奴に弱音なんて……吐きたく……ない）

呪力まで用いたおぞましい肛虐に未成熟な肢体をいのように弄ばれ、どす黒い呪力が腸壁を浸透し体内へと侵入してくる。凍えるように冷たい闇の力、それなのにその力を受けた肉体が火がついたように熱くなった。

無理矢理抉じ開けられた不浄の裏門。いくら小振りとは言え全く慣らされてもおらず、濡れてもいない孔内を硬い棒型で擦られ、削られる。痛みこそ薄らいだが、本来なら排泄すべき器官に異物を逆方向にねじ込まれる苦しみ。何よりも体内に呪力が浸透してくるおぞましき、それらがいつせいに少女の小柄な肉体と精神を苛んでくる。

「うっ、ぐっ、はあ……こ、こんな……も、もうやめ……てえ……ひあああつ!!」

内臓を揺さぶるような激しい挿肛、痛みは薄らいでも、その異物感と圧迫感は相当のものだ。だが排泄行為は人間である以上、どんな聖者もその快感から完全に逃れることはできない。

「大丈夫だって、僕が代わりにお兄ちゃんになってあげる。だから諦めて僕のそばにいな
って……」

「だ、誰が貴方を兄なんて……ひいあつ、んああ、も、もう動かないで……きひいうう
ううっ!!」

心の奥底、もつとも大事にしてきた兄への思慕まで穢されるようで決死の思いで声を猛
らせた。だが子宮口付近を亀頭で捏ね回すように挟られると、秘宮の芯で快楽が赤い火花
となって飛び散る。天を仰ぎ、形の良い顎を震わせながら浅ましい嬌声を絞り取られた。

「ほら、呼んでごらんお兄ちゃんって、お兄ちゃん大好きって言ってごらん……」

「いやっ、いやです。そんなこと絶対……ふうあ……駄目……先が擦れて……くうん
っ!!」

強気な反論も胎内をさらに強く挟られると、甘える子犬のように鳴き声にとって替わら
れる。ズンズンと子宮まで響く振動に、爛れた牝の悦びが鋭い矢となって快楽中枢に突き
刺さる。

「はあっ……はあっ……お、お願い……です。も、もうこれ以上は……んん……
っ!？」

か弱く拒絶に振られていた頬が男の両手に挟まれ、桜色の唇がまたも男に塞がれる。悲
しい懇願の言葉は男の口内に奪い去られ、可憐な舌が陵辱者の舌に絡め取られると淫らな

ダンスの相手を強要された。黄ばんだ歯と真珠色の美歯がコツコツとぶつかりあう。涙で濡れた紺碧の瞳が見開かれ、小さく震える喉が反らされた。

(い、いやっ……なんで？　なんで、こんな……キスだけなんかで……え)

最初は緊張し縮こまっていた臆病な舌も、今は積極的に自身を絡めながら心地よく舞い踊っている。狭い口の中では唾液が掻き混ぜられる音を伴奏に、淫らな舞踏会が開催中だ。口の中全てが気持ちいい。唇の裏を甘噛みされると後頭部のあたりがピリリと痺れる。歯茎や歯の一枚一枚を丹念に舐め擦られるのが癖になってしまっそうだ。

(いや……違う……違うの。こんなの私……わたし……)

誰への言い訳か必死に意識の中で否定し、ギョツと目を閉じる。だが悔しさも悲しみも怒りも恥じらいも、全ての負の感情がマゾヒスティックな悦びへと変換されていく。

「ふう……やれやれ、まだそんな素直じゃないこと言ってるのかい」

「はあ……はあ……はあ……ああ……」

長い舌舞の末にようやくサリアの唇は解放され、混ざりあった唾液のアーチが二人の間を繋ぐ。酸素を求めて喘ぐ少女魔法使いの瞳は虚ろで、薄暗い部屋の弱い灯りに映し出される美貌は媚熱に紅潮していた。酸素を求め荒い息をつく桜色の唇の端からは透明な雫が伝い落ちる。

「素直に快楽に溺れちまえばいいのに……安心していいよ。サリアちゃんが僕なしじゃあ

居られないのううって、くらいメロメロな身体になったって、ずうっと可愛がつてあげるからさ……」

「はっ……あつ、や、いやああ……そんな……そんな……こと……お……ふああつ!!」

まるでお前を飼つてやると言わんばかりの嘲弄の言葉にさえ満足に返事もできない。反らされた喉を唾液の跡を残しながら舌が這い、少女の悲痛な喘ぎと甘い嬌声が室内に響く。二人の激しい動きにベッドが悲鳴を上げながら激しく揺れ軋んだ。

必死に噛み殺された艶を帯びた喘ぎ、嫌悪と屈辱、そして秘せない情欲を宿した艶声——快樂の前に幾度となく敗北したサリアは、それでも勝ち目のない戦いに挑むことをやめない。何度となく女肉を貫かれ、男に延々と抱かれ続けながらも抗った。

「ふ、ふあああ……やあつ……み、耳い……耳噛まないで……あきやううう——ッ！」

そんな必死に湧き上がる感覚を否定しようとする強情な魔法少女も、耳朶を甘く噛まれるだけで背中が悦びに震えて抵抗を忘れる。ベッドのシーツを縋るように握りしめてしま

う。
蕩ける脳裏に幾度も浮かび上がる諦観と否定。認めたくない。突きつけられている自分の淫らな現実を……。認めたくない。自分がこんなにも快樂に弱い女であることを……。

「これから、その極上の身体に毎日、毎日、毎日……お兄ちゃんが女の悦びを教えてあげ

るからね♪」

「そ、そんな、いらぬい……いらぬい……ですう……いやつ、はあ、あはあああッ！
わたし、そんなあ……くううつ、やつ、ふ、あああああ……!!」

男の動きに合わせ、厚い胸板に潰された形良い胸の頂が擦れあい、白のブラウスがはだけられ、露にされた桜の蕾から危険で卑しい電流が駆け上がった。

鋭い媚電流が背筋を伝播し、下半身から断続的に襲い来る肉悦の雷光と合流すると脳天へと突き抜ける。堪えきれず反らされた白い喉を、男はさも美味しそうに舐め上げた。

「あああああ……ひあうつ……こ、こんなの……こんなの……え……ッ!!」

胸が、腰が、男と重なりあう熱く火照った肌のあちこちが快楽を受信して我慢できない。絶対的で、絶望的で、破滅的な快楽が堪らなく気持ちいい。

男と肌を合わせ、初めて異性を受け入れた身体が勝手に女の悦びに目覚めていく。どうしようもなく乱れてしまう。抗いようもなく溺れてしまう。

「んあああああ——ッ!! 胸……胸え……胸弄つちやあ……ッ!!」

キュつと指先がサリアの薄い胸の頂をつまみあげた。淫呪と男の責めで快楽神経を剥き出しにされ、掠めるだけで悦びを提供する悦びの玩具が久々に送られる鋭い刺激に歓喜の悲鳴を上げる。

「へへへ……こんなに可愛い胸してるのに……そりゃあ勿体ないな……んちゅつ……」

スリスリと指の腹が、乳頭のすそ野を挟んで擦る。逆の胸では男の唇にすっぽりと包まれた乳首が舌と歯の甘い洗礼を受けている真つ最中だ。情弱な快樂乳果はサリアの意思に反し、甘く淫らな電流を盛んに脳へと発信して散々に苛めてくる。

「あひうん……胸エ……!! 駄目……もう舐めないで……ひつ、す、吸うのも……ダメえええ……ッ!!」

「ううん、だめだめつて注文が多いなあ……我が儘言っちゃ駄目だよ。サリアちゃん」
カリッ!!

「ひああああッ!!」

桜色の蕾を甘噛みされると、その一点から迸った淫撃に脳を激しく揺らされ、白い喉が弾かれるように反り返る。男の責めの何もかもにこの身体は過剰に反応を返してしまう。情けなかった。こんな卑劣漢に屈し、悦んでしまう卑しい自分の身体が……。

「やあつ……いやあつ……いやあああつ!! こんな……どうしてええ? こんなに身体が気持ち……こんなな気持ちいいんですう……? こんなのおかしひひ……っ!!」

縮れた陰毛に剥き出しのクリトリスを擦られ、思わず叫び洩れてしまった本音に青ざめる。そして自分を見上げニヤニヤと笑う男に向け、必死に声を上げた。

「あ……ち、違つ……こ、これは……違うの……違いますっ!!」

怯えるように首をフルフルと左右に振り、今にも泣きそうな声で絶叫する。だがいったん声に出してしまった言葉はどんなに否定しても戻らない。かけられるだろう侮蔑の言葉に、暴かれるだろう惨めな少女の敗北の証に身体がギュツと縮こまる。

「違わないよ。ほおら、素直になつて。お兄ちゃんは素直なサリアちゃんが好きだなあ」
 「だ、駄目……駄目。こんな奴の言葉に流されては……で、でも……アソコも、胸も、身体中が痺れて……熱くなつて……も、もう……わたし……わたし……」

無理矢理奪われ、開かされた身体が勝手にトロトロに熱く溶けていく。蜜壺と化した子宮内から、膣壁の一枚一枚から、涸れることなく甘い蜜が零れだし、シーツを、互いの恥毛を、男の肉茎を潤し続けた。

「ほおら、次は僕の好きな体位でやらせてもらうね」

「やつ、あああああッ!!!」

男はそう言うのと、サリアを貫いたままその小柄な身体を抱え起き上がる。無理な体位の入れ替えに、肉の先端に胎内がさらに深く強く擦られ、少女は高々と悲鳴を上げた。

ベッドに横たわる男の肉體、その腰の上に跨がるようにサリアは座らされ、自重で深まる繋がりグチュリと泡立つ愛液が押し出される。俗に言う騎乗位と言う体位。子宮を突き上げるような激しい衝撃に、真っ赤な快樂の火柱に、意識を上から下へと高々と突き上げられた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>